学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０２０年９月１４日
文責：ＪＵＮ

「何を学ぶか」が明確な協同的学びに

「私たちがよりよく生きていくために欠くことができないもの、それはコミュニケーションだ。人に語りかけ、人の言葉に耳を傾け、人と触れ合うことで、生きてゆくことができる。コロナ禍のいま、私たちは、そのことの重さを噛みしめなければならない」

テレビの番組で、ある小説家がそのようなことを語っていた。

その通りだ。人と人とのつながりが失われ、人と人とが分断されたら、人間社会は乱れ、生きることの豊かさが失われる。しかしコロナ禍は「３密」を悪とする。その「コロナ禍対策」をそのまま無制限に受け入れたら、人と人とののつながりはなくなってしまう。それでよいわけはない。しかしコロナへの感染で私たち自身を危うい状態にすることはできない。私たちは、今、この重大な二つの狭間で困惑させられている。

学校で子どもとともに生きる私たち教師は、目の前の子どもたちが未来を担う存在だと考えたとき、子どもと子どもの間を分断する方策をそのまま受け入れることはできない。なんとしてでも、人と人とのつながりを失くさないようにしなければならない。しかし、当たり前のことだが、コロナ禍である“今”の状況を無視してよいわけはない。どうればよいのだろう、心ある教師は皆当惑している。

けれど、一つだけ言えることは、コロナ禍以降を見据える眼力を持たなければならないということである。その眼力さえあれば、きっと何らかの知恵が生まれる。刹那的に“今”だけ見つめるのではなく、先を見ようと努めていたら、暗闇の中の一筋の光が見えてくる。その光が見えれば、どれだけ今の状態が厳しいものであっても、耐えることができる。

１　グループにすることの前に必要なこと

「学び合う学び」に取り組むということは、子どもの机をすべて前に向けた一斉指導型から脱却し、子どもたちをグループにして対話的に学ばせることだ、そのように考える人がいるのではないだろうか。

その考えは間違いではない。子どもの学びの質を保障し、子どもに学ぶ喜びをもたらすために、なんとしても一斉指導型授業から脱却しなければならないのは当然のことである。断っておくが、教師が子ども全員に、自ら有している知識や経験からの心を込めた語りをすることを否定するものではない。むしろそういうことは必要であり、それくらいのことをやろうとする教師に私たちはならなければならない。また、これだけはなんとしても身につけさせなければならないと教え諭すこともあるだろう。けれども、それは、教室における教育活動の部分であり、それが大半を占めるようなことがあってはならない。なぜなら、学びは子どもが思考し、探究し、発見するという、子ども自身の取組に

よってなすべきものだからである。

しかし、その、思考し、探究し、発見するという活動は簡単なことではない。自分一人で行っているとわからなくなったり、行き詰ったり、低次なところで留まってしまったりしてしまう。だから、協同的学び・対話的学びが必要なのだ。つながりが一人ひとりの学びを豊かにするからである。グループにするのはそのためだ。

そういうことからして、グループにして対話的に学ばせることが「学び合う学び」だと言うことは間違ってはいない。しかし、では、グループにしさえすれば「学び合う学び」になるのかと問われると、「イエス」とは言いづらい。グループになって学習しているというのは外見的な「学ぶ形」に過ぎないからである。重要なものであるにはちがいないが。

では、協同的・対話的学びにとって、グループにするという「形」以外に、何が必要なのだろうか。

それは、「形」を意味のあるものにする力を有しているものと言ってよいだろう。私たちが行う授業だけでなく、どのような分野でもそうだが、「形」を単なるカタチにしない、つまり、そういう形がなんとしても必要だと思わせる何かがなければならない。それは、そこで行う営みの「中身」だ。つまり「何を」に魅力がなければ、どんなに形を取り入れても、そこで生み出すものの質を上げることはできない。

私は、授業をする教師が安易にグループ学習を取り入れること、そしてグループにしたことで協同的学びをしていると思ってしまうことはよいことではないと思っている。グループにはなっているのだけれど、大声で一方的にしゃべる子どもがいるなど、とにかくテンションが高いとか、逆に、何を話してよいかわからず時間がたつのをじっと待っている子どもが何人もいるとか、あっけなく終わって手持ち無沙汰にしているとかいったグループにしてはならないからである。

そうなる原因はいくつもあるのだけれど、もっとも大きな原因は、そもそもグループになって取り組む子どもの意欲とか意思とかがはっきりしていないことである。それは、学びの課題とかテキストに魅力がない、または魅力を感じるような提示がなされていないことに起因する。つまり「何を学ぶか」に教師の心が配られていないのである。

協同的・対話的な学びに慣れるため、常時、グループにすることは必要なことである。けれども、どれだけの時間グループにしても、どれだけ学び合い方を指導しても、そこに「学びの中身」が伴っていなければ、それは所詮「形」だけのものである。何よりも大切なのは、教師が、子どもが意欲的に取り組もうとする「課題・テキスト」を示すこと、つまり「何を学ぶか」ということをしっかり準備することである。

２　学習材をどのように魅力的な課題として準備するか

コロナ禍の今、教師たちは様々なことへの対応で追われるような日々を送っている。そのことはメディアでも報じられ、だれもの知るところとなっている。文科省の大臣も教師の責任感・使命感の強さを称えている。しかし、その教師の激務を和らげる具体的対策はほとんど講じられないのはどういうことだろうか。

そのような現状を考えると、毎日毎時間の授業づくりに、多くの時間とエネルギーをかける余裕は乏しくなっていると言わざるを得ない。これは由々しきことである。２か月に及ぶ休校によって生じ

た「学習の遅れ」を取り戻すために、子どもが魅力を感じるかどうかを考えず、子どもに取り組ませる時間がないからと、教師から一方的に教え込む、超特急の進め方の授業になっている可能性があるからである。

もちろん、感染症対策は怠ってはならない。子どもの健康にかかわることをないがしろにするようなことは許されない。けれども、その感染症対策を怠らないとしても、その一方で、未来を担う子どもたちの学びの質を下げない努力も怠ってはならない。何がなんでもグループにして学ばせよと言っているわけではない。私は、感染症対策をしたうえでも、何らかの手立てをとることによってグループにすることはできると考えているが、たとえグループにしない全員前向きの並べ方であっても、子どもが取り組む学びにすることはできるとも考えている。もちろんそれでは、グループで学ぶほどの濃密さは期待できないけれど、それでも、仲間と考え合う「学び合う学び」にすることはできると考えている。魅力的な「課題」さえあれば。

そこで、超多忙を極める教師たちに言いたいのは、すべての教材に対してでなくてよいから、深い教材研究ができなくてもよいから、学ぶ子どもがやる気を起こすような課題づくりを、一つでも多く手掛けてほしいということである。少し考えれば、その気になれば、そのための手掛かりはいくらでも転がっている。

小学校５年国語「漢字の成り立ち」の題材化

…… 一つの例として

５年生の教科書に「漢字の成り立ち」という小単元がある。漢字はどのように作られ、どのようにして現在のようなものになったのかを学ぶ２ページ仕立てのものである。漢字が絵のようなものから出来ているということはすでに一年生で学習していることだが、ここでは、その出来方には、象形文字、指示文字、会意文字、形声文字があることを学ぶということになっている。

これをそのまま、教師が説明して教えてしまったらなんとも味気ない学習になってしまう。子どもたちの未来にとって漢字力はかなりの大きな位置を占めるにもかかわらず。このままでは、漢字は、ただの記号として回数多く書いて覚えるだけのものになり、人類が産み出した文化としての色合いは薄まってしまう。それでは、子どものことばの力を弱めてしまうことになる。

漢字を文化として感じさせようとするとき、「成り立ち」ほど絶好のものはない。私は、当たり前のように日々使っている漢字を人類が産み出した文化として学ばせたいと思っているが、それにはこの小単元をもっと重要視しなければならない。

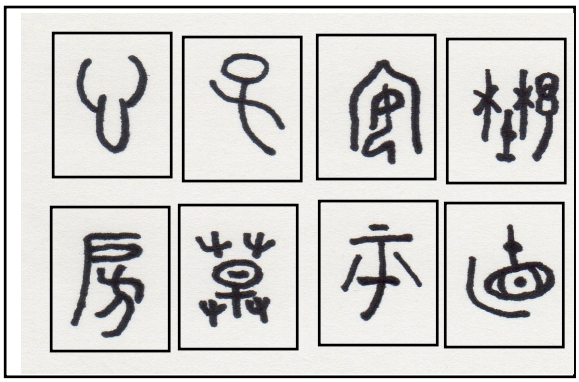
ところで、子どもにとって最も身近な漢字とはどんな漢字だろうか。

それは、自分の名前なのではないだろうか。ところが、その自分の名前の漢字がどういう成り立ちをしているのか、そして、その成り立ちにどういう意味があるのか知っている子どもがどれくらいいるだろうか。そう考えたとき、子どもたち一人ひとりに自分の名前の漢字に向き合わせる、そして探究させる、そういう課題へのアイディアが湧いてくるのではないだろうか。

以下の述べる授業プランは、そうしたアイディアに基づいて私がつくってみたものである。

授業は、全２時間、もしくは３時間で行うものとする。第１時においては、教科書にあるような４つの成り立ちを学習することとする。その学びが、残りの１時間もしくは２時間の子どもによる探究的学びのベースとなる。

- 第２時。何も言わずに右の印刷物を配る。少し眺めさせた後、「ここに、４年生の国語で学習した詩や物語の２人の作者の名前があります。さあ、それはだれでしょう」と問う。この課題のために４年生の国語の教科書を準備させておく。そして、教科書を眺めながら一人ひとりが考えてもよいが、ペアやグループになって考えるとなおよい。



- いくつかのグループが気づくまで待って全体で確かめてもよいし、なかなか気づけないようだったら、そこまでで気づいたいくつかの漢字について全員で確認しさらに考えさせるようにしてもよい。どちらにしても、作者の名前が「草野心平」と「安房直子」であることに気づかせる。

心	子	安	野
房	草	平	直

- そうしておいて、この８文字を、象形文字、会意文字、形声文字に分けるという課題を出す。いわば「ジャンプの課題」である。第１時で学習した際には、指示文字もあったのだが、指示文字は数が少ないのでここにはそれがないと知らせておく。もちろん、ここでも、できれば、ペアかグループになって取り組ませるとよい。
- 「心」と「子」が象形文字だということは比較的早く気づくことができるだろう。もしそうなったら、そうだということを早い目に全員で確認して、残った６文字を二つに分けるように仕向けるとよいだろう。
- 会意文字と形声文字に分けるには、それぞれの組み立て方が理解できていないといけない。しかし、前時でさっと学習しただけなので理解度はそれほど高くないだろう。けれども、古代文字から見つけるという学び方だとなんとかわかりたいと一生懸命になる。これがこの課題の良さである。「房」や「草」は今の漢字と古代文字が似ているので案外早く気付けるだろうが、会意か形声かとなるとわからなくなるのではないだろうか。それを考え続けることで、この学習の目標に迫っていく。「ジャンプの課題」の良さである。
- 「安」が会意文字だということは早く分かるだろう。女の人が家の中にいると安心などと考えるに違いない。それに対して「房」は「戸」と「方」の組み合わせだが、「方」を「ホウ」と読むことから形声だと気付けるかもしれないし、「草」も「早」を「ソウ」と読むことから気づくかもしれない。しかし、「直」と「平」が会意、「野」が形成であることについては行き着けないことも考えられる。状況を見て、辞書を引かせることになるかもしれない。
- 子どもたちの学びの進行状況によって、この「ジャンプの学び」を１時間とするか２時間とするか、その判断が必要になるだろう。
- 締めくくりはとっておきの課題だ。それは、子どもたち一人ひとりに「自分の名前の成り立ち」を考え調べさせることである。仮名文字が名前の子どもにはその仮名がどの漢字から出来たかと考えさせるとよい。子どもにとって自分のことほど関心の深いものはない。だから意欲的に取り組み始めるに違いない。ただし、困難さを感じる子どももいる。子ども同士の支え合いを促したい。日本語の不自由な子どもがいる場合は、カタカナを漢字に換えればどうなるか考えると面白いかもしれない。それには周りの支えが必要で、できればその漢字の字源まで調べさせたい。最後に「これが私たちの名前の漢字だ」といった冊子を作らせてはどうだろうか。

３　再び生まれ始める授業づくりへの取組

冒頭、コロナ禍の今こそ、コミュニケーションの大切さに目を向けなければならないという小説家の言葉を紹介した。それは、経験したことがない未曽有の危機的状況に振り回され、大切な視野と思考を失いかけた私たちへの警鐘だと言えた。

コロナ禍が始まった当初は、感染拡大を恐れるがあまり、人とのつながりを絶つための指針を、とにかく厳密に、しかも一律に実施しなければという空気に包まれた。離れる、対話をなくす、封鎖する等の対策をとることによって感染を封じ込めようとしたからである。しかし半年近くなった今は、「with　corona」と言われるようになり、最初の頃のコロナだけにつよく特化した対応ではなくなった。つまり、コロナ対策をとりながらも、どのようにして人間らしく生きていける社会にしようかと考えるようになったのである。もちろんそれは難しいことであり、さまざまな葛藤を抱えてはいるのだけれど、それがコロナと闘いながら生きるということなのだとわかってきたからだろう。

日本の学校が長く行ってきた授業研究は、世界に誇る学校文化だと言われる。子どもを豊かに育むための授業はどうあるべきか、それを、互いの授業を参観し合い協議することによって深め合う、その教師の共同研究が世界の教育者において賞賛されているのである。私は、その授業研究を支え促進する「外部助言者」としての役割を担っている。

それが、コロナ禍になって以来、昨年度までのようにできなくなった。出社しない「テレワーク」が推奨されたり、「ステイホーム」と言って、不要不急の外出を避けるようになったりしたことにより、学校への出入りを自粛しなければならなくなったからである。

こうして私の学校訪問は、休校していた頃はもちろん、学校が再開になってからもほとんど中止になった。落ち着いて学べる学校の状況をつくらなければならない、感染症対策も手探りで行わなければならない、そして遅れた学習を取り戻さなければならない、これらのことに教師たちの意識が縛られてしまったことも大きい。こうしてゆっくり授業研究をする余裕は失われることになったのだった。

しかし、短い夏休みを終えて開始された２学期、ようやく教師たちの心に、よりよい学びが生まれる授業にしていかなければという思いが宿ってきた。授業研究への意欲が少しずつ戻ってきたのである。政府の感染症対策の分科会から第２波のピークが過ぎたという判断が出され、夏休みを大幅に縮めて行った授業によって遅れた学習をかなり取り戻したことにより、教師たちの目が学習の「質」に向くようになったのだと言える。

こうして、９月も中旬になった今、ようやく私の学校訪問も実現できるようになった。その皮切りが３日だったが、しばらくぶりに目にする学ぶ子どもたちの姿、その子どもたちに向き合い授業をする教師たちの姿は、なんともなつかしく、いとおしく私の目に映ったのだった。

ただ、この授業研究への思いの強さは、何も、教師たちや私のような外部助言者だけのものであってはならない。学校を管轄する教育委員会にこそなければならない。時の動きと地域に応じた施策を講じ、予算を立て、それぞれの学校の取組を指導しバックアップして教育の質を高めるのが教育委員会の役割なのだから、その教育委員会に授業研究への熱がなければならない。

ある市の話である。まだ県外の外部助言者の来校は自粛していた頃のことである。助言者来校がだめならオンラインでやりたいと考えた学校があった。それに対して、その市の教育委員会事務局が全

面的な支援をしたのである。学校の企画に耳を傾け、それならこのようにすればオンラインで外部助言者に授業映像を送ることができるとその方策を示し、そのうえその学校に足を運び、必要な機器を持ち込み、タブレットで撮影するその画像を各教室から発信できる環境を整えてくれたのである。

感染症対策をとりながらも、どうやったら教師たちの熱意に応えられるか、そして子どもたちの学びを保障させられるか、その市の指導主事たちはそう考えて知恵を絞ったのである。指導という名のもと規制することばかりになるのではなく、学校の自発的な取り組みの支援をしてくれたのだ。このような対応をしてくれる教育委員会があるのだ。指導主事がいるのだ。そこには、前述した、日本が世界に誇る授業研究という学校文化を守り育てるという意識と、それをコロナ禍においても実現させようという責任感が感じられる。

冒頭の小説家が述べた「コミュニケーション」は、「学び合う学び」では「聴き合い」であり「学び合い」である。子どもたちにとって、他者と聴き合うこと、学び合うことは、豊かな学びを築くためになくはならないことである。そして、そこで生まれる「つながり」は、社会で生きていく私たちにとって欠くことのできないものである。

コロナ禍は、いのちの危機をももたらすとともに、その「コミュニケーション」「つながり」を危うくした。コロナ禍は、私たち人間に大変な苦難をもたらしたのだ。私たちは、今、その苦難の真っただ中にいる。ただ、それが大変な苦難であるだけに、人として生きていくうえで、何が大切なのか気づくことができたとも言える。この気づきをしっかりと抱いて、子どもたちに向かわなければならない。今、私たちに必要なのは、どんなことがあっても、いのちの大切さから目を逸らさないこと、そして人間らしい生き方を失くすようなことにはしないという覚悟なのだ。

****

私的なことになるが、私は 10 月で 77 歳になる。喜寿である。本来は数え年でこのように呼んで祝うものだが、本人からすると、その年齢になる誕生日をもってそういう感慨に浸れるように思う。

思い返せば、私は、良くも悪くも一本道を歩んできた。一度思い込むとまっしぐらという若いときの一途さが私の歩みを一本道にしたのだが、それだけ不器用なのだと言える。ただ、結果として、学ぶ子どもと授業をする教師、そしてそのつながりから生まれる学びを見つめ続けてこられたことは幸せだったと思っている。

間もなく、喜寿の感慨を味わうこととなる。けれども、それも一つの通過点。八十路に近づき八十路を歩むこれからを、さあ、何をして、どのように生きていこうか。

と言っても、私にできることは決まっている。「学び合う学び」に心傾ける人たちとともに、「学び合う学び」の事実にどこまでも寄り添うことだ。

それらの人たちの多くはずっとともに歩んできた人たちであり、当然、これからもお付き合いいただけるだろう。けれども、私の知らないところに、「学び合う学び」への思いをかき立てておられる未知の人や未知の学校が存在しているにちがいない。もし、可能なら、どうか連絡していただきたい。私にできることがあれば、お役に立ちたいと思う。それが、これから私がやらなければいけないことにちがいないのだから。　　(ご連絡は東海国語教育を学ぶ会のお問い合わせから)

****